南北市羅

なんぼくしてき

2017

第１１号

壱岐の糸撚り民具

長崎県埋蔵文化財センター

糸撚り民具から歴史を探る

長崎県埋蔵文化財センター　東アジア考古学研究室　　古澤　義久

埋蔵文化財センターに勤める私たちにとって、地中に埋まっていたり、水中に沈んでいる文化財、すなわち埋蔵文化財が、主な調査や研究の対象となります。埋蔵文化財を調査したり研究する学問としては、考古学が最も一般的な学問ということになります。しかし、歴史を復元する学問には、考古学以外にも、歴史的な文書を対象とする文献史学（狭い意味での歴史学）などがあり、そのうちの一つに民俗学という学問があります。

民俗学は風習や民話、民具など古くから民間で伝承されてきた有形・無形の資料を対象として、日常生活の歴史的な変遷を考える学問です。考古学では、例えば、縄文土器から弥生土器へ、弥生土器から古墳時代の土師器へというように古い段階から新しい段階へ歴史的な変遷を追究するのが一般的ですが、民俗学では、現在残っている伝承の中で、新しい要素を分けていき、古い要素を見つけ出すというように、新しい段階から古い段階へ遡る形で歴史的な変遷を明らかにしていくことが一般的です。対象や方法は異なっていますが、考古学も民俗学も、歴史を復元するという目的では一致する部分もみられます。

さて、民俗学で扱われる民具にもいろいろな種類がありますが、私は、糸を撚る道具に注目し、研究しています。糸を撚る道具の中で、弥生時代から利用されている道具に紡錘（つむ）があります。紡錘というのは、紡錘車や紡輪と呼ばれる穴の開いた小さな板状の道具に、紡茎と呼ばれる棒を組み合わせた道具です（図 1）。糸というのは、繊維に撚りをかけて作るものですが、紡茎の先端に繊維を結わえたり、絡ませたりして、紡錘全体を回転させます。このとき、紡錘を効率的に回転させるために紡錘車の遠心力を利用します。紡錘が回転すれば、繊維に撚りがかかるので、撚りがかかった糸は、紡錘車より上の部分の紡茎に巻いておきます。そして、同じ作業を繰り返し、繊維を糸にしていきます。

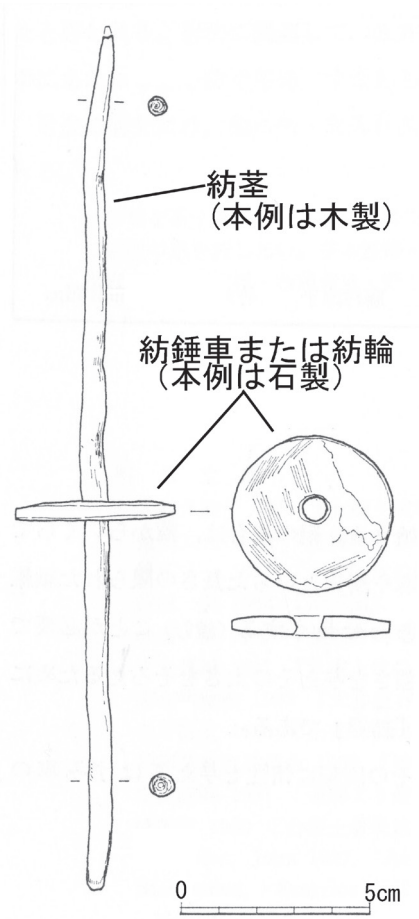

図 1　大阪府鬼虎川遺跡出土弥生時代紡錘（藤村淳子 1985「紡錘車」『弥生文化の研究』より転載・改変）

弥生時代の遺跡からは、紡錘の部品のうち紡錘車が出土することが多いです。長崎県の弥生時代を代表する環濠集落である原の辻遺跡では、これまで、土製、石製、鯨骨製の紡錘車が出土したことがあります（図 2）。紡茎は木の棒などの有機物が利用されることが多かったので、出土例は稀で

土製

石製

鯨骨製

図２　原の辻遺跡出土各種紡錘車

図３　壱岐の紡錘【ケーズミ】

すが、全国的には、紡茎に紡錘車が取り付けられた状況で出土した事例も知られています。

弥生時代には既にみられたこの紡錘が民具として近現代まで利用されていたことは、民俗学界ではよく知られていることでした。私の住む壱岐でも、郷土史家であり、民俗学者であった山口麻太郎氏によって「ケーズミ」と呼ばれる紡錘が利用されていたことが論文に記されたことがありました。しかし、壱岐の「ケーズミ」についてはこれまで、図や写真が公表されたこともなく、その実態は必ずしも明らかではありませんでした。

私は、壱岐の「ケーズミ」の実態を知りたいという思いから、壱岐島内をいろいろと探索したところ、壱岐市教育委員会所蔵の民具の中に「ケーズミ」や関連する道具を見つけ出すことができました。

問題のケーズミは木製の紡錘車に鉄製の紡茎が組み合わさっていました（図３）。全長は 41.4cm、総重量は 144.5g です。紡茎の先端は鉤になっていて、繊維をかけることができます。紡錘車は平面はややいびつな円形で、断面は上面が膨らむ低い弓形となっています。壱岐では「コカシギ」と呼ばれる手押木（テシロギ）という木片と「コカシダイ」と呼ばれる手押台（テシロダイ）という台で紡茎を挟んで、こするように前に転がすことで紡錘を回転させます。手押木は側面が山形や六角形、断面は台形の長さ 18cm 程度の木片が用いられ、摩擦する部分には格子目の刻みが入ります（図４, 図５）。手押台は直方体の木材の一部を切除して、膝などで支えることができるようになっており、摩擦

図４　壱岐の手押木【コカシギ】1

図５　壱岐の手押木【コカシギ】2

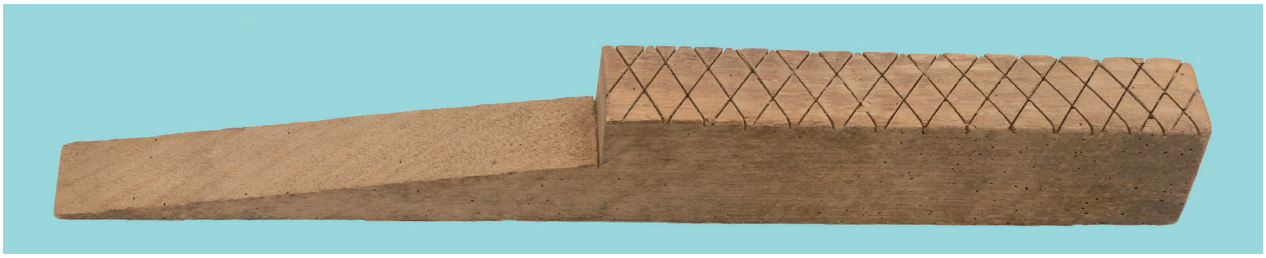

図６　壱岐の手押台【コカシダイ】

図７　壱岐のツムウケ【ヨリサセギダイ】

する部分にはやはり格子目の刻みが入ります（図６）。そして、紡錘の回転を安定させるためにツムウケ（壱岐では「ヨリサセギダイ」と呼びます）という台を用います。ツムウケは丸太を輪切りにした木材の中央を窪ませてあり、ここで紡錘が安定して回転できるようにしています（図７）。壱岐では、このような道具はカヤ畳の織糸として麻糸を撚るために用いられました。

紡錘は壱岐だけでなく、日本全国に民具として残っていますので、全国の事例と比較してみました。東京湾、相模湾、駿河湾一帯では、漁業用の網糸や釣糸を撚るために紡錘が用いられており、早くから研究が活発に行われていました。いろいろな形の紡錘車がありますが、多くはおもちゃのコマのように、上が平坦な円錐形をしています。このような太平洋側の紡錘車の形とは異なる形の紡錘車が佐渡に存在するということも早くから注目されてきました。佐渡で網糸を製作するために使われた紡錘車の形は上が膨らむ断面弓形で、壱岐と一致しています（図 8-11,12）。そこで、壱岐と佐渡を繋ぐ各地域の事例を確認すると、出雲、丹後、越中など、日本海側で、同じ形をした紡錘車が確認されました（図 8-2,4,5,10）。このようにして壱岐から佐渡に至る日本海側では、上が膨らむ断面弓形をした紡錘車が民具として残っているという事実が明らかになりました。

その理由の一つの可能性として、近世や近代における日本海沿岸の交流ということも挙げら

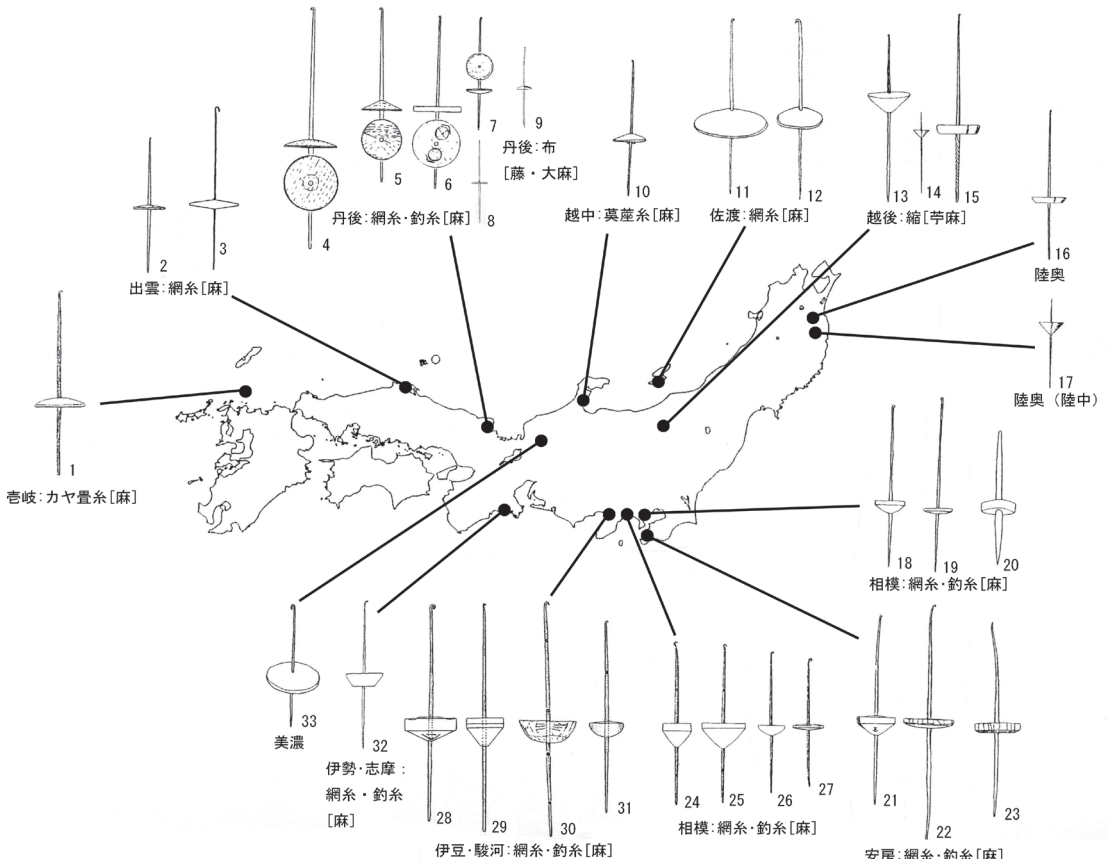

図８　日本列島の民具紡錘

られるかと思います。日本海沿岸では近世から近代にかけて北前船による交易がみられましたが、その北前船は壱岐にも来ていたという記録があります。交易路に沿って、紡錘車の形も伝わっていったのでしょうか。今後も研究を進めていきたいと思います。

紡錘の付属道具である手押木や手押台も全国の事例と比較してみます。全国の手押木や手押台の組み合わせを確認すると、さまざまな形が存在することがわかります。手押台には足が付くものや、舟の櫓を転用したものもあります。そのうち、直方体の一部を切除した壱岐の手押台とよく似た事例は陸奥（青森県）で確認され、ここでは壱岐の手押木とよく似た形の手押木も認められます（図 9-7,8）。

それでは、なぜ、壱岐と陸奥という非常に離れた地域の手押木と手押台がよく似ているのでしょうか。

ここで、民俗学でいう「（方言）周圏論」がヒントになるのではないかという可能性が浮上してきます。「周圏論」とは、日本では民俗学者・柳田國男が唱えた考え方で、戦前から 1960 年代頃まで日本民俗学では大変流行した考え方です。柳田國男はカタツムリをその土地の言葉でどのように表現するかということを調べた結果、近畿地方では「デデムシ系」、中部地方や中国地方では「マイマイ系」、関東地方や四国地方では「カタツムリ系」、東北地方や九州地方では「ツブリ系」、東北地方北部や九州地方西部では「ナメクジ系」の呼び名で呼ばれることが多いことを指摘しました。都のあった近畿地方を円の中心として、都からの距離に応じて、共通する方言で呼ばれるということが言えます。このことは、都で次々に新しい言葉が生まれ、波紋を描くように、周辺に伝わっていったとするもので、周辺へいけばいくほど、都の古い言葉が残っていると考える考え方です（柳田國男 1930『蝸牛考』刀江書院）。

近年では『探偵！ナイトスクープ』というテレビ番組の企画で、「アホ」や「バカ」といった言葉では何がよく使われるかを調べた結果、近畿地方では「アホ」、関東・東北地方など東日本と中国西部・四国西部・九州地

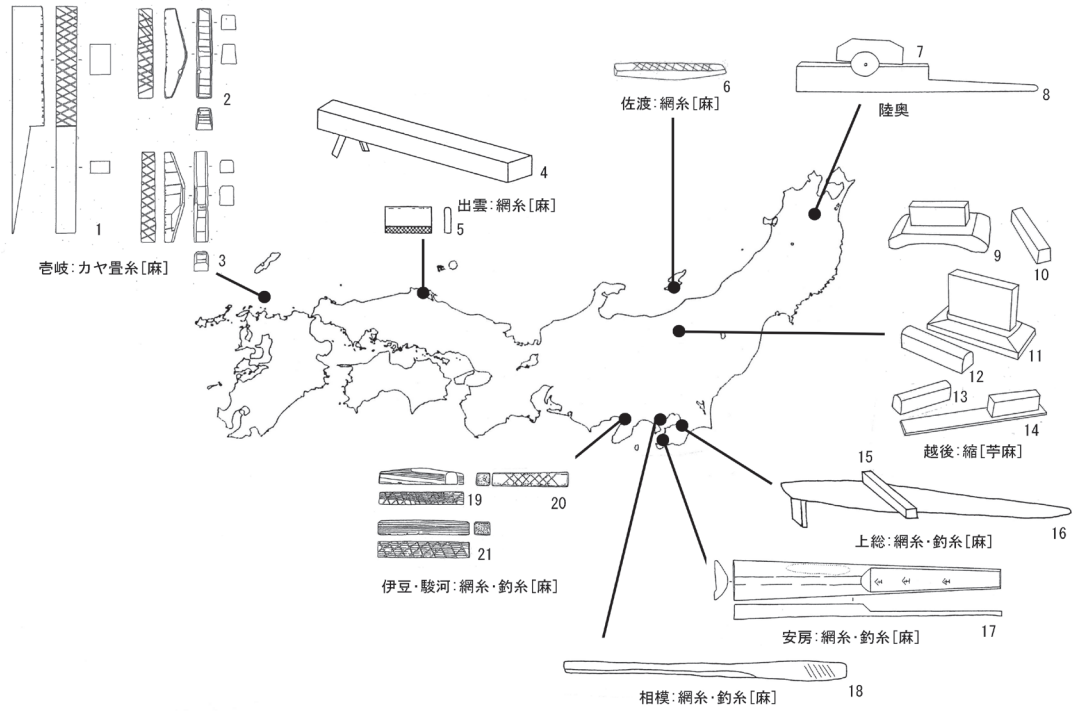

図 9　日本列島の民具手押木・手押台

図10 『石山寺縁起絵巻』(14世紀)の手押木・手押台(澁澤敬三 1984『新版絵巻物による日本常民生活絵引』第3巻より転載・改変)

図11 『越能山都登』(18世紀末)の手押木・手押台(文化庁文化財保護部編 1975『紡織習俗Ⅰ新潟県・徳島県』より転載・改変)

方など西日本では「バカ」、九州地方南部と東北地方では「ホンジナシ」系の言い方が分布していることが判明し、やはりおおむね都を中心として同心円状に方言が分布していることがわかりました(松本修 1993『全国アホバカ分布考はるかなる言葉の旅路』太田出版)。

こうした周圏論という考え方が、壱岐と陸奥の手押木・手押台の分布に適用できるでしょうか。そこで、古い絵画資料にあたってみますと、正中年間(1324～1326年)に成立した『石山寺縁起絵巻』第二巻には、近現代の壱岐や陸奥と同様の手押木・手押台の組み合わせが利用されている絵が認められます(図10)。時代はずっと下って寛政12(1800)年に成立した『越能山都登』という越後地方の文献にはやはり直方体の一部を切除した形の手押台がみられ(図11)、現在越後に伝わる民具の手押台とはやや形が異なります(図9-9,11,14)。このように14世紀頃の都の近辺、18世紀末の越後、そして近現代の壱岐と陸奥の手押木・手押台の組み合わせが共通することがわかります。つまり壱岐や陸奥では、比較的古い形態の手押木と手押台を使い続けた一方で、現在の越後、上総、出雲などにみられる足が付くような手押台は各地で比較的新しい時期に出現したが、それらは壱岐や陸奥には伝播しなかったか、受け入れられなかったのではないかとも考えられます。ただし、手押木・手押台の報告事例は依然少なく、このような仮説が正しいかどうか、今後も地道に全国の事例を調査して検証していくことが重要です。

このように、民具を調べることで、紡錘や付属道具の変遷をある程度想定することができました。そして、このような新しい側から追っていく民俗学的な研究成果と、古い側から追っていく考古学的な研究成果をうまく繋ぎ合わせれば、いつかは日本の糸撚り道具の変遷を活き活きと描き出すことができるのだろうと思います。

参考文献や内容の詳細につきましては次の文献をご参照ください。

古澤義久 2015「壱岐島の紡錘・ケーズミ―紡錘の地域差―」『民具マンスリー』48-9

南北市糴第11号　2017年5月15日
編集・発行　長崎県埋蔵文化財センター
〒811-5322　壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-1
TEL 0920-45-4080　Fax0920-45-4082